

平成20年度

波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査

現地説明会資料

かみのむら
上ノ村遺跡



(川下側よりみた調査区全景 手前が第2地点、奥が新居城跡と第1地点)

記者発表 2009年3月6日(金)午前10時30分～11時30分

現地説明会 2009年3月8日(日)午後1時30分～3時30分

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会
国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

波介川河口導流事業について

波介川は、仁淀川の支流にあたりますが上流に行くほど地盤の低い低奥型の地形であるため、大雨の際は幾度となく地域に洪水被害をもたらしてきました。特に昭和50年8月の台風5号による水害は流域に深刻な被害をもたらしました。

このような状況を受け、国土交通省では現在の合流点を仁淀川河口へ付け替え洪水時において仁淀川からの逆流による影響を除き、波介川の洪水を安全に流下させ、内水被害を大幅に軽減させることを目的に「波介川河口導流事業」を行うことになりました。

I 調査の概要

1. 発掘調査名

平成20年度 波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査 上ノ村遺跡発掘調査

2. 発掘調査の目的

波介川河口導流事業計画区域内における事前の試掘確認調査を実施し、計画地内に所在する埋蔵文化財のうち工事により影響を受ける部分について記録保存のための発掘調査を行う。また平成17年度以降の発掘調査出土遺物等の整理作業及び報告書作成を行い、埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

3. 事業主体

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

4. 調査主体・実施機関

高知県教育委員会

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

5. 調査場所

高知県土佐市新居上ノ村(図2参照)

6. 調査協力

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

土佐市教育委員会

7. 調査地点・面積・各調査区調査時期

調査区名	調査面積㎡(延べ)	調査期間
1 地点-5 区	3,800 ㎡	2008 年 4 月～7 月
1 地点-6 区	5,600 ㎡	2008 年 7 月～2009 年 3 月
1 地点-7 区	4,600 ㎡	2008 年 9 月～2009 年 3 月
2 地点	7,140 ㎡	2008 年 6 月～2009 年 2 月

合 計 21,140 ㎡

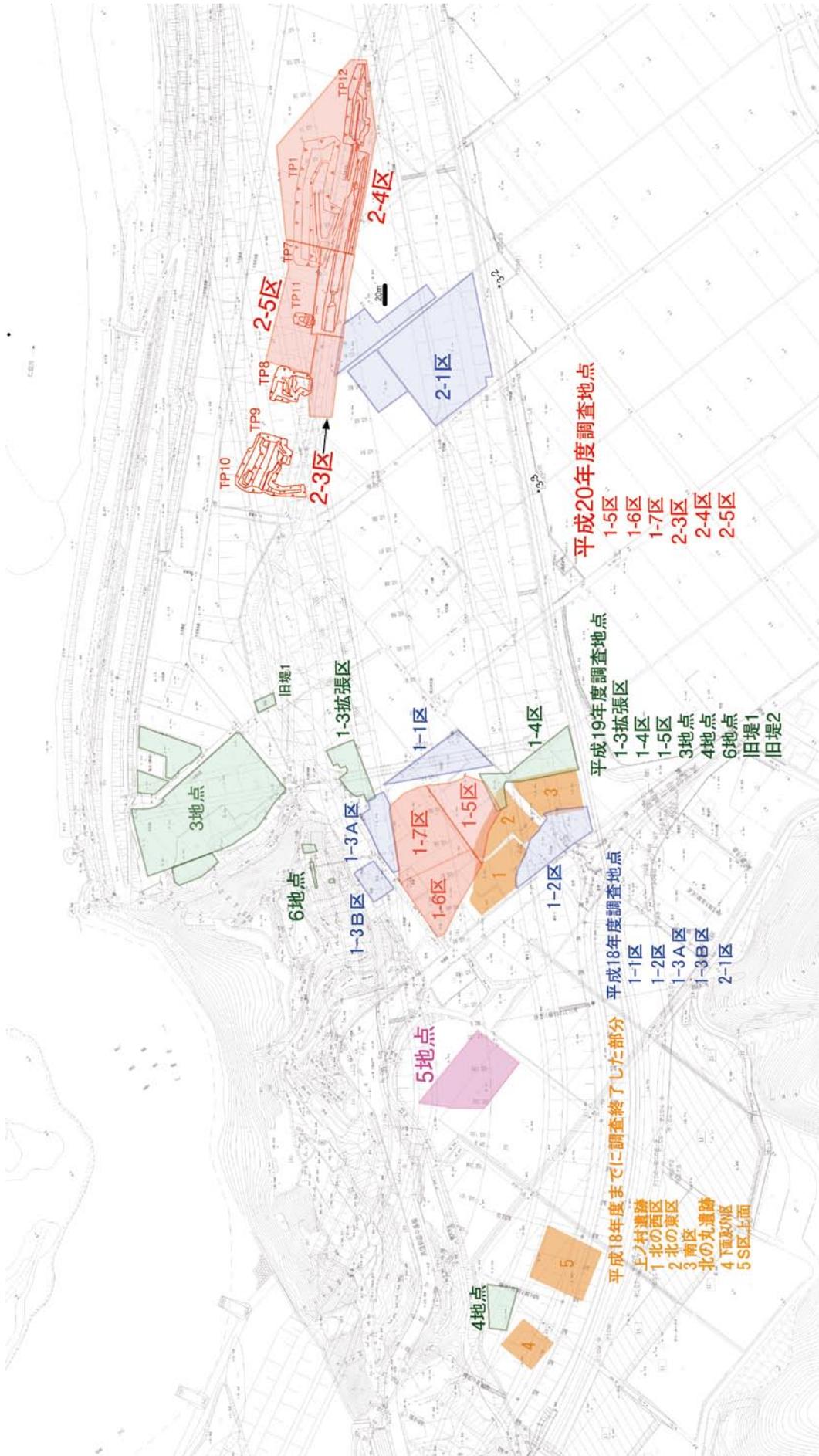


図1 これまでの調査を行った場所と本年度の調査区

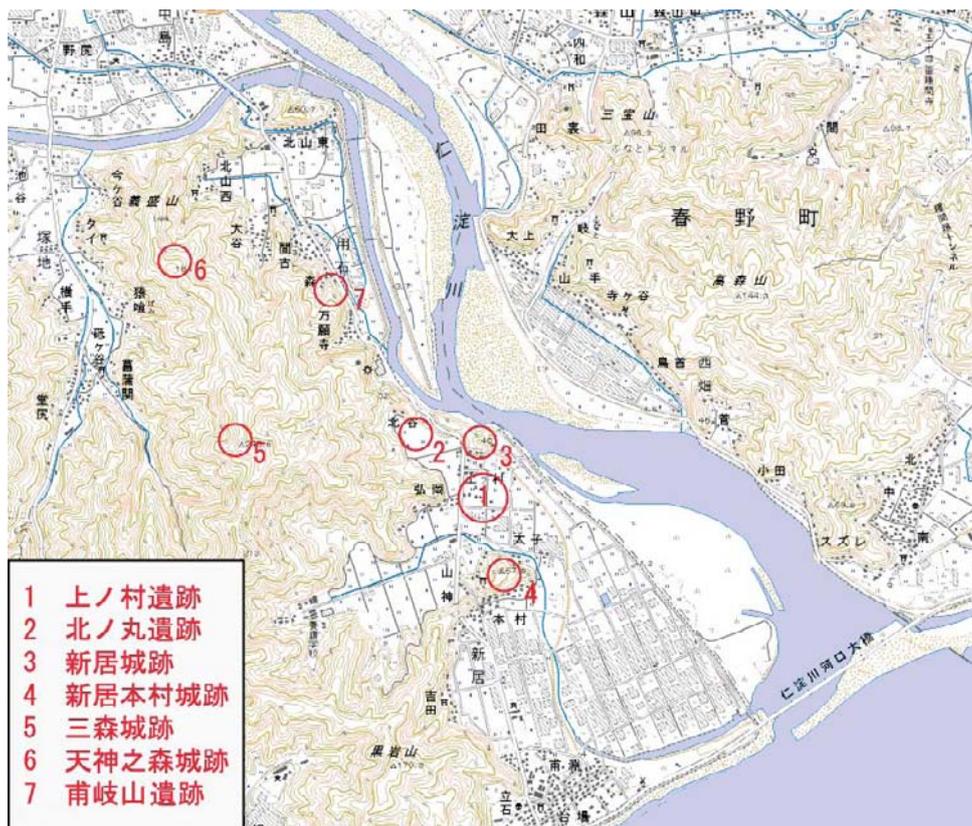


図2 周辺の遺跡

II これまでの調査

上ノ村地区では2004年度より波介川河口導流事業に伴う発掘調査を実施しており、本年度で5年目を迎えました。これまで北ノ丸遺跡、上ノ村遺跡の調査を行っています。(図1参照)

2004年度 北ノ丸遺跡(図1 調査区位置図4・5)

低湿地に立地することから、多量の木製品が良好な状態で出土しています。古墳時代(6世紀後半)の田下駄や建築部材ともに、貴人が用いたと考えられる衣笠の一部や槽作りの琴が出土しています。このように希少な木器が出土することは、当地域が古墳時代から重要な地域であったことを示しています。

2005年度 上ノ村遺跡(図1 調査区位置図1～3)

古代(8世紀～12世紀)、中世(13世紀～15世紀)の遺構・遺物が多く出土しました。鎌倉～室町時代では、中国産陶磁器や近畿、東海地方など他地域で作られた陶磁器が多く出土しています。平安時代では、近畿方面産の「緑釉陶器」や「黒色土器」が多数出土しています。これらは、役所や豪族の館で多く出土するものです。

本遺跡は仁淀川河口に近く、波介川との合流地点にも近い立地で、当時は水運・交通と深く関わっていたと考えられ、上記のように特徴的な出土遺物もそのことと関連すると考えられます。

2006年度 上ノ村遺跡(図1 調査区位置図青字部分)

本遺跡で初めて弥生時代の遺構・遺物が出土しました。古代～中世の遺構・遺物も、引き続き

多数検出しました。新居城跡の裾では、断面V字状で「堀」ともいえる溝跡を確認しました。また室町時代(15世紀)以降、集落が川寄りの南東側に広がることがわかりました。出土遺物はやはり他地域産の焼きものが多く、2005年度の成果を補強しました。

2007年度 上ノ村遺跡(図1 調査区位置図緑字部分)

新居城跡南側の第1地点と東側の第3地点、および新居城跡の調査を行いました。第3地点で縄文時代晩期の遺物が多数出土し、上ノ村地区の歴史を大きく遡る事ができました。

古代～中世においても遺跡の広がりや内容に関する資料がより充実し、川の湊である「川津」として位置付けられるようになりました。また、江戸時代の大きな井戸跡があり、引き続き人々が生活していた痕跡が認められます。城山については、残念ながら後世の開発で壊されている部分が多く、山城の遺構は確認できませんでしたが、大戦時の塹壕跡を調査しました。地区での聞き取りと併せて、太平洋戦争時における地域の歴史資料を掘り起こし、共有することができました。

Ⅲ 本年度の調査

1 地点

調査1地点は、中世の山城である新居城の南裾部です。調査は工事の進展に合わせて行い、本年度は3年目で調査の最終年度です。現在までの調査で縄文時代から江戸時代の遺構・遺物が出土しており、遺構や遺物が出土・検出される土層が3層(一部4層)あることがわかっています。今年度の調査区はこれまでの調査区に隣接しており、空白であった部分が解明されました。

上層から検出した順にみゆくと、江戸時代では井戸跡等が出土しました。井戸の井筒は桶の側部分を重ねたものでした。

中世では室町時代～鎌倉時代の遺構・遺物を検出しました。室町時代の遺構では、箱形の堀形を持った溝跡が1-6区～1-7区、1-1区で確認されました。幅約1.9m、深さ約0.4mの大きな溝跡で、新居城の山下部分をコの字状に区画していた可能性があります。当該期の遺物の出土量は過年度に比較してやや少なく、本年度調査地点が集落の中心ではないとみられます。過年度の成果からは、川寄り・川下方向に集落が拡大した可能性が考えられます。

平安～鎌倉時代では、断面V字状の溝跡2条や多数の柱穴等を検出しています。遺物出土量はこの時代が最も多く、集落が一定のピークを迎えたと考えられます。遺物は、近畿産の「瓦器」や中国産青磁・白磁が多数出土しています。

奈良～平安時代では、方形堀形の柱穴や完全な形の土器(杯)3個と赤漆皿、銅銭などが入っていた土坑などを検出しており、掘立柱建物跡も4棟検出しています。これらの掘立柱建物跡の柱穴はいずれも一辺1mほどの方形で、深さは約0.8m残存するものがあり、丈夫な建物が想定可能です。遺物は多量の素焼き食器や煮炊き用の土器の他、京都近郊でつくられた「緑釉陶器」も出土しています。河川に近接した立地や大型の柱穴、および出土遺物からみて水運に関連する役所的な施設の一部である可能性が高く、上記の丈夫な建物については倉庫の可能性が考えられます。

古墳時代の遺構は本年度調査まで確認されていませんでしたが、1-6区で一辺約4mの溝に囲

まれた1間×1間の掘立柱建物跡を確認することができました。通常の方形竪穴住居跡と異なり、周りを溝で囲まれることや炉跡を確認できないことから特殊な性格を持つ建物跡の可能性が考えられ、過年度調査で琴や衣笠などの出土例が少ない古墳時代の遺物が出土していることから祭祀関連の遺構である可能性も考えられます。

弥生時代では、1-5区で溝状土坑を伴う掘立柱建物跡1棟、1-6区で住居跡1棟と溝状土坑などを確認しています。過年度の隣接調査区でも溝状土坑群を確認しており、瀬戸内地域の影響を強く受けた「凹線文」で装飾された弥生時代中期末の土器も出土しています。この土器は、物部川流域に比べ、仁淀川流域ではあまり出土していなかったものです。弥生時代は、概ね紀元前約800年から紀元約250年までの期間で前期・中期・後期に分けられ、中期は約2000年前にあたります。本年度出土した弥生時代中期末の遺構は、溝状の土坑や炭化物が集中して堆積した土坑、住居跡などの可能性が考えられる円形の竪穴遺構があります。円形竪穴遺構からは、凹線文の土器や高知県独特の特徴を持つ土器とともに稲刈り用の石器(石包丁)3点が出土しました。

特に注目されるのは、多数の鉄製品がこの時期の諸遺構から出土していることです。これは鉄が貴重品であった当時の社会を考えると、きわめて興味深いことです。日本列島における鉄の出現は、縄文時代末から弥生時代初頭に遡るといわれていますが、その分布は北部九州地域に限定される傾向があり、その地域においても製品のみが大陸から伝わった様相を呈しています。日本列島における鉄および鉄製品の生産の開始は、もう少し後の時期になります。高知県では対岸の高知市春野町にある西分増井遺跡が鉄器生産遺跡として知られていますが、同遺跡は弥生時代後期に属します。今回の発見によって、本県における鉄器の本格的使用が弥生時代中期末に遡るとともに、今後の整理と検討によって、鉄製品の生産・加工の実態にも迫れるかも知れません。このように、四国でも貴重な本遺跡の調査成果を各地の遺跡と比較することにより、日本列島における鉄器生産の歴史にも関連してくる可能性があります。

当遺跡では、縄文時代の遺物と遺構も出土しており、1-5区では土坑1基を確認しました。昨年度の第3地点の斜面部(新居城跡東側)では縄文時代晩期の土器が多量に出土しましたが、明確な遺構の確認には至っていませんでした。本年度出土した土坑は、平坦部で検出された明確な縄文時代晩期の遺構として重要です。

2 地点 石積み堤防・石積み護岸遺構の発見

下流側の調査区では、地元で「中堤防」と呼ばれていた古い堤防を断ち割ると、中から石積みの堤防が出てきました。「ハツリ」加工した石を積み上げ、内部には拳よりやや大きめの川原石を選んで詰めています。上部は断面ドーム状に仕上げられており、このような造りと形のは全

	確認長(m)	幅(m)	高さ(m)	法面傾斜	石材規模(m)/加工	積み方	付属施設/修築	推定時期
石積み護岸遺構	250	3.5～9.5(残存)	2.0～4.3(残存)	38～40°	0.45～1.1/自然石	野面積み	突堤状遺構 平場 石出し	江戸初期
石積み堤防遺構	120	7.0	4.2	41～45°	0.2～0.6/ハツリ	落し積み	修築2回以上。 のち盛土。	近代

国的にもめずらしいようです。石の積み方等から大正～昭和期の可能性が考えられますが、今のところ記録等が発見されておらず、工事の経緯は不明です。

この堤防遺構の下部を調査していると、地中からさらに石積みが出土しました。この石積み遺構は片面だけが見つかったため、以下「石積み護岸遺構」と呼ぶこととし、上記の堤防遺構は「近代石積み堤防遺構」と仮称することとします。石積み護岸遺構は地中から出土しており、近代石積み堤防遺構と上下で交差している部分もあることから、石積み護岸遺構の方が古いことは明らかです。

石積み護岸遺構の基本的な特徴として、まず自然石をそのまま活かして積み上げた「野面積み」であることがあげられます。近代石積み堤防のつくり方とは大きな違いがあり、江戸時代初期頃の特徴を示しています。その他、石積みの傾斜や、築石の大きさ(表参照)、内側に礫をほとんど詰めていないことも近代石積み堤防と異なる点です。

石積み護岸遺構のその他の大きな特徴として、平場や突出部分などの付属施設があげられます。平場は護岸遺構の中ほどの高さに造られており、幅は約7.6 m、長さ44 m、その端からのびる突堤状遺構は長さ40 m強を測り、さらに下流側へ「捨て石」を配しています。これと同じ江戸時代の施設は、本県内外でも知られていません。機能として、増水時に護岸本体を守る働き等が考えられますが、当遺跡でみつかったものの規模や、大きな石の面を揃えて丁寧に造っていることから、その他の働きも考えられます。当地には、長宗我部地検帳で川津(川の湊)関連の地名がみえることや、近年まで「渡し」があったことから、舟着きに関わる機能があった可能性もあります。また、その他の部分でも、石造りの台状遺構や、「石出し」と呼ばれる突出部などの付属施設が各所にみられます。

護岸遺構の類例を調べてみると、確実に江戸時代以前といえる石積み護岸は全国でもごく限られており、和歌山県や広島県、京都・宇治市にあります。全てにおいて詳しい内容が解明・公表されているわけではありません。その他にも江戸時代あるいはそれ以前に築かれたといわれる事例は各地にあります。施設の性格上後世の改修を含むものがほとんどです。発掘調査で出土し、当時の姿をよく留めた今回のような事例は貴重です。

今回の工事に伴って確認された石積み護岸遺構の延長は250 mに及び、さらに工区外へ延びています。江戸時代において、上記のように大きな石材を使用する工事は、大きな労働力と高い技術を要したと思われますが、当遺構について直接に記した文献等は今のところ知られていません。土佐藩の開発事業を指揮した野中兼山との関係を示す史料もみつかりませんが、県下には当時築かれたとみられる石積み遺構が各所に残っています。また、石積み技術の集大成といえる城郭の石垣をみれば、高知城には野面積みも多くみられます。掘り出された当遺跡の石積み遺構は、今後これら県下の石積み遺構群と比較・検討することにより、土佐の石積み技術を知ることのできる資料となります。さらに、類例が全国的にも少ない中で、豊臣秀吉がつくらせた宇治市の「太閤堤」と当遺跡の護岸遺構との類似点も指摘されており、わが国の伝統的土木技術史に係る資料としても注目されます。

今後は、遺構の記録保存を前提とした断ち割りや内部構造の調査を行う計画です。現在、発掘現場では、江戸時代、大正～昭和、昭和(前堤防)、平成(新堤防)という4つの時代の護岸・堤防がみえます。仁淀川という圧倒的な自然の恵みと災害に向き合った人々の足跡と現在の到達点は、われわれに未来への展望を与えてくれることでしょう。

写真 1



1-5区 下面（古代～中世）の掘りあがった状態



溝跡から遺物が出土した状況



弥生時代の溝状土坑と掘立柱建物



溝状土坑から遺物が出土した状況



縄文時代の土坑から遺物が出土した状態



1-7区 江戸時代井戸跡の断ち割り



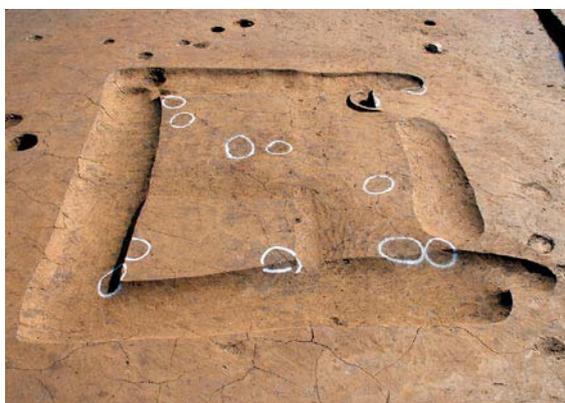
1-6区 平安時代の緑釉陶器



1-6区 土坑から遺物が出土した状況



1-6区 下面(古代)掘立柱建物跡



1-6区 古墳時代の溝囲掘立柱建物



1-7区 土坑の遺物出土状態



1-7区 弥生時代竪穴遺構から遺物が出土した状況



竪穴遺構出土 石包丁

写真3



2 地点護岸・堤防遺構全景（川上側より）



護岸・堤防遺構（直上より）



護岸・堤防遺構（川上側より）



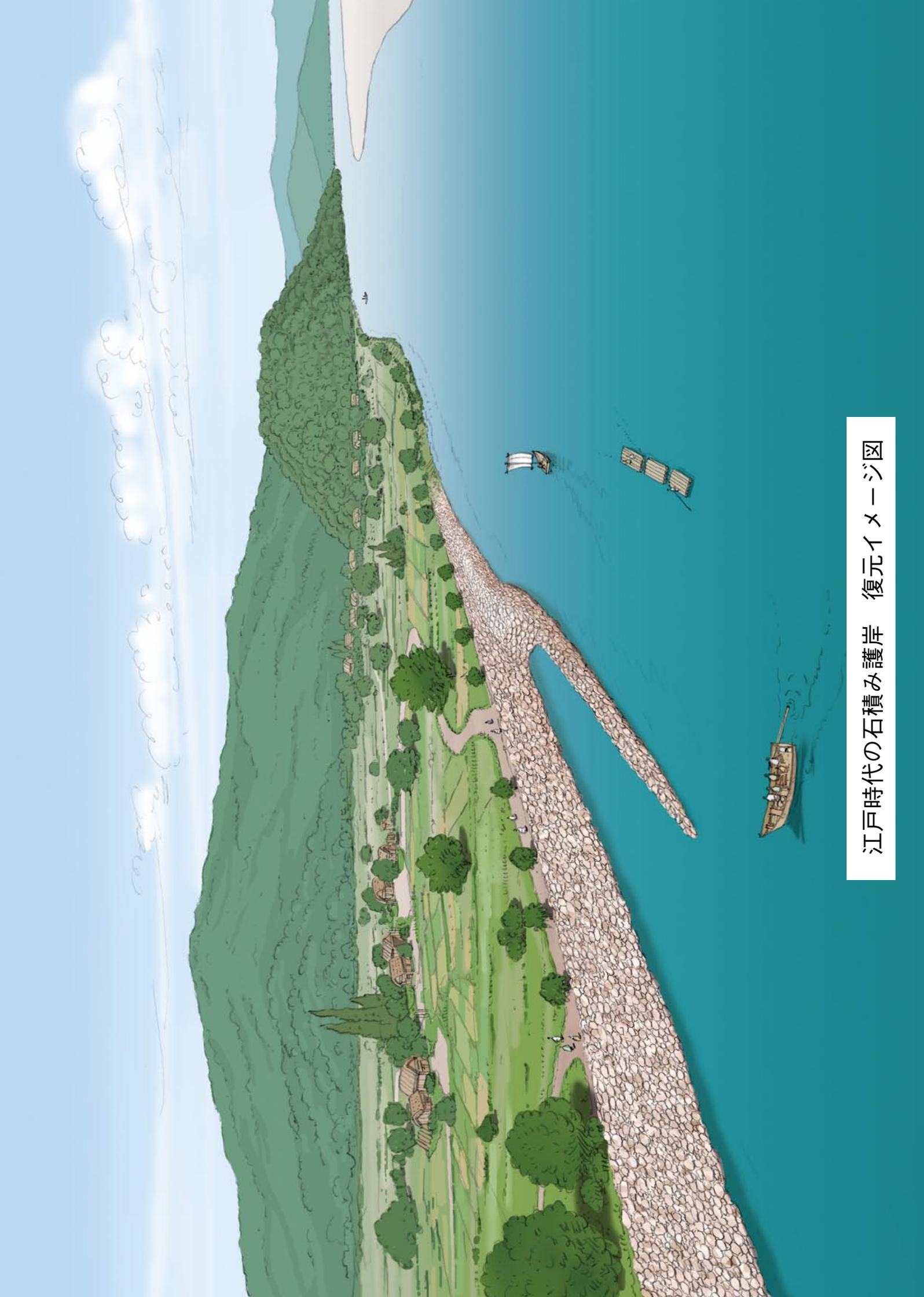
護岸遺構の平場部分と、堤防遺構との交差部（川上側より）



台状遺構（川下側より。北端試掘確認調査区）



中世の上ノ村遺跡復元イメージ図



江戸時代の石積み護岸 復元イメージ図